

概要

CHAPTER 3 (P.10)

交流の促進でふくらむ村の未来

泊村アイスセンターの運営だけでは採算はとれない。しかし大学・企業チームの合宿など、新しい交流が生まれた。村は交流人口の増加をどのようにとらえ、地域振興に取り組んでいるのか。村の未来づくりのために進行している行政の施策とは。

CHAPTER 2 (P.9)

スポーツが沸き起こす「いきいき効果」

アイススケートに馴染みのない地に建設された「泊村アイスセンター」。村が考えたその目的と効果とは。小学生アイスホッケーチームはなぜ結成されたのか。子供たちはアイスホッケーから何を学び、住民はどんな影響を受けているのか。

CHAPTER 1 (P.8)

村の人々を活気づけるアイスホッケー

たった十年で全道でも有数の強豪チームに成長した泊ブルーマリオンシャークス。その強さの秘密と、それを支えるものは。小学生だけでなく村と地域の大人たちを熱くさせている「長ぐつアイスホッケー」の魅力とは何か。

北海道とはいえ、まったくアイススケートに馴染みがなかった泊村に小学生の強豪アイスホッケーチームが誕生した。また大人たちも「長ぐつアイスホッケー」というユニークなスポーツに取り組み、活気にあふれている。人口の減少や少子化といった問題を抱える中で、村が打った地域振興策とは何か。それによって住民たちはどう影響を受け、どう変わったのだろうか。

オールシーズン型・屋内リンク完備 泊村アイスセンター「とまリンク」

後志管内で唯一屋内アイスリンクを持ち、一年を通してスケートが楽しめる総合アイススポーツセンター。廃校となった旧泊小学校校舎を有効利用した施設で、愛称は「とまリンク」。

リンクはアイスホッケー公式国際競技規則に沿って設計されており、日本アイスホッケー連盟が認定した公式の大会も開催される。また公式戦を想定した練習ができるため、道内外の高校や大学、企業などのアイスホッケーチームの合宿所としても最適。最近では年間40を超えるチームが訪れるなど大いに利用されている。

施設内には各種トレーニング機器を備えたトレーニングルーム、シャワー室、ミーティング室、フォーム調整室、体育館が設けられ、トレーニングルームは村民をはじめ近隣町村の人たちの健康増進のためにも役立っている。

- 開館時間：午前9時～午後9時
- 休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
- アイスアリーナ使用料：小中学生 100円・高校生 200円・一般 300円
- トレーニングルーム、体育館使用料：一律 200円
- スケート靴貸出料：一律 100円



旧泊小学校校舎部分を活用しつつ、校庭部分にアイスリンクが新設された



最新型のランニングマシンが並ぶ



村民の冬場の健康増進のために各種の機器が備えられている

PICK UP!

氷上の熱気を明日への推進力に

アイスリンクを活用した泊村の元気作戦

地元の小学生アイスホッケーチームが地域の大会で四連覇を達成。村に活気を与えている。アイスセンター施設を核としてスポーツ交流による振興策を進める泊村の取り組みをレポートする。





市民スポーツとして定着しつつある
長ぐつアイスホッケー

だからみんな一生懸命です。親だつて遠征先で親同士の交流を楽しんでいます」と高橋さん。シャークスが強くなった要因のひとつに、父母たちの熱い支援があることも確かだ。

大人たちはリンクで 長ぐつアイスホッケーに熱中

泊村アイスセンターのさらなる活用を目的として、平成十六年からスタートしたのが長ぐつアイスホッケーだ。長ぐつでプレーするので、スケートができなくても誰もがアイスホッケーを楽しめる。現在、岩宇地域で十五チーム（一チーム十から十五人）あり、泊村だけでも七チームが活動している。プレーヤーの八割が男性、高校生から四十代くらいまでがメインだが、六十代の人がいいたこともある。また中学生だけのチーム、女性だけのチームもある。

「釧路で行われていた長ぐつアイスホッケーの試合を青年部の者がテレビで観たのがきっかけです。これならできそうだからやってみよう」と、見よう見まねで始めました」と語るのは、泊村商工会青年部部長の妹川達也さん。早速、青年部で長ぐつアイスホッケー発祥の地・釧路へ視察に行ったところ、選手たちの真剣さ



泊村商工会青年部
部長 妹川達也さん

に心を打たれたという。「意外にハードで奥が深い。これはいけると思い村や近隣地域の人たちに声をかけたところ、次々とチームができました。遊びのつもりが、だんだん『勝ちたい』という意識が芽生えてきて、各チームで作戦を練って練習するなど、予想以上の盛り上がりとなりました」

全国大会の混成の部で 泊村選抜チームが優勝

平成十七年からは、「泊村長杯長ぐつアイスホッケー大会」も開催されるようになった。ますます地域の選手たちの熱意は高まり、技術も向上していった。そして今年の二月、釧路で行われた全国大会において、泊村選抜が男女混成の部でみごと優勝したのである。

「レベルが上がって強いチームも出てきましたが、泊村を含む近隣地域の親睦を深めることも大きな目的のひとつです。実力があがると楽しくプレーできなくなるの

で、強いチームが弱いチームを教えるなどして地域間の差を縮める努力も必要だと思えます。また、四十歳以上のシニアの部を設けるとか、各チームにシニアや女性を必ず数名入れるなど、いろいろと工夫して盛り上げていきたいです」と、妹川さんはさらに意欲的です。泊村はアイスホッケーで子供も大人も活気づいて

★「長ぐつアイスホッケー」とは

釧路が発祥とされる日本生まれのスポーツ。文字通りスケート靴の代わりに長ぐつをはいて行うアイスホッケーで、同じリンクを使い、ルールもほぼ同じ。ただしパックは丸くて柔らかいウレタン製のボールを使用し、スティックも曲がりの角度が異なる。1チーム8人で試合を行い、アイスホッケーのような途中での選手交代はない。試合時間は前・後半5分ハーフの合計10分と短い、かなりハードで疲れるという。

現在、北海道の他に東北や関東にも多くのチームがあり、毎年2月に釧路で全国大会が開催されている。泊村でも平成17年から「泊村長杯長ぐつアイスホッケー大会」が開催され、村内外から毎年10チーム以上が参加して熱戦を繰り広げている。



意外にハードで奥が深い氷上スポーツ

CHAPTER 2

スポーツが沸き起す「いきいき効果」

アイスホッケーが 子供たちに与える影響

平成八年、泊村にあった四つの小学校（堀株、茅沼、泊、盃）が旧盃小学校の敷地へ泊小学校として一校に統合された。泊村アイスセンターは、廃校になった旧泊小学校の施設を有効活用する目的で建設されたの

だ。建設にあたって、泊村ではアイススケートに馴染みがなかったため賛否両論があった。しかし将来を考えた前村長の英断で、オールシーズン型の屋内リンクを備えた施設（当時、北海道で五つしかなかった）が誕生したのである。村では泊村アイスセンターの活用目的として「村の活性化」「氷上スポーツの振興」「住

村の人々を活気づけるアイスホッケー

地元の小学生チームが 大会四連覇を達成

今年二月、泊村アイスセンターで開催された「第十一回泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会」において、泊ブルーマリオンシャークス（以下シャークス）が優勝。みごと四連覇を成し遂げた。

シャークスは、岩宇地域（岩内郡・古宇郡）の泊村、岩内町、共和町、神恵内村の小学生を対象に、平成十一年夏に結成されたアイスホッケーチームだ。現在のメンバーは、男子・女子合わせて十四人。財団法人札幌アイスホッケー連盟にチームが加入している。北海道内には他にも苫小牧、釧路、旭川など七つのアイスホッケー連盟があり、全道合わせて四十ほどの少年アイスホッケーチームがある。泊村と札幌アイス



泊ブルーマリオンシャークス
監督 澤口 繁豊 さん

ホッケー連盟の主催で毎年二月から三月に行われる「泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会」には、シャークスの他に札幌、苫小牧、旭川、室蘭などから選抜された五チームが参加する。いわゆる「地元の利」があるにせよ、結成わずか十年のチームが並み居る強豪たちを相手に四連覇を達成したことで村や近隣町村は大いに盛り上がっている。

スケートに馴染みがない地域に 強豪チームが誕生

北海道のウィンタースポーツといえば、日本海側ではスキー、雪の少ない太平洋側ではアイススケートが盛んである。泊村のある地域ではアイススケートに馴染みがなく、シャークスは後志管内では唯一の少年チームだ。

「大人も子供もスケート初心者で、まずリンクに立つて歩くことから練習を始めました」と、現シャークス監督の澤口繁豊さんはチーム結成当時を語る。平成十年、泊村アイスセンターのオープンを機に、村からの呼びかけで小学生のアイスホッケーチームを作ることになった。外部からアイスホッケー経験者二人が、リ



結成6年目には全道小学生アイスホッケー選手権大会でベスト8に進出した

ンクの整備員も兼ねて泊村アイスセンター職員としてコーチに雇われた。メンバーを募集したところ、思いのほか多くの小学生が集まったという。

「始めは興味本位だったと思います。パイプ椅子につかまってやっと氷の上を歩いていた子供が、どんどん滑れるようになり、やがて夢中でパックを追いかけるようになった。親の転勤で仕方なくやめる子はいても、上手くできないからといってやめる子は一人もいませんでした」と澤口さん。毎日二時間（夕方四時半から六時半まで。土・日は別時間帯）、子供たちは練習に励んだが、当初は試合をすれば連戦連敗。それでも年々上達してゆき、結成時に一年生だった子供が六年生になった六年目には、なんと札幌で行われた全道小学生アイスホッケー選手権大会でベスト8に進出し、第六回泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会で初優勝したのだった。

チームをしっかり支える 父母たちの熱意

「チームが強くなった要因は、やはりオールシーズン練習できるリンクがあること。それに村の支援ですね。泊村長杯の四連覇は、地元の応援に任せようとする気持ちの部分が大きいのではないだろうか」と、チームの父母会の副会長である高橋鉄徳さんは語る。シャークスでは、主に技術面をコーチが、精神面を監督や父母たちが受け持っている。やはり小学生チームなので、何かと父母たちの支援は欠かせない。たとえば遠征試合の付き添い。宿泊費などは各親が負担する。試合におけるタイムやスコアの管理、場内アナウンスなどの作業も父母たちが受け持つ。休日も返上して子供やチームのために働かなければならない。

「確かに親の負担は大きいのですが、アイスホッケーを通しての子供たちの心身の成長、ほかの地域の子供たちとの交流などメリットも大きい。



泊ブルーマリオンシャークス父母会
副会長 高橋 鉄徳 さん

スポーツの振興を目標に掲げている。泊村アイスセンターのほかにもスポーツ施設「とまりカブトラインパーク」（パークゴルフ場）が開設され、村内外の人が集うレジャースポットとして利用されている。

「交流とスポーツという面では平成六年から毎年開催されている『HOKKAIDOとまりマラソン』も大きな役割を果たしてきました。また観光交流としては夏のイベント『群来まつり』も毎年たくさんの人を集めています。海岸を走る国道二二九号が整備され、小樽から積丹半島を巡って岩内へと続く『カブトライン』は絶好のドライブコースとなり、観光交流への基盤もできました」と西宮さん。

外部との交流を充実させるためには内部の充実も必要である。泊村は村内の全戸と公共施設を光ファイバーでつなぐ情報ネットワーク「とまりねっと」を整備。家庭と医療機関・役場などを結んで、村一体となったサービスの向上や防災に取り組んでいる。

また「ふるさと定住促進事業」を推進。結婚後三年以上村に住むことを条件に十万円が支給される「結婚祝金」、第二子以降を出産した場合に十万円（一人増すごとに十万円加算）が支給される「出産祝金」などの制度で定住を促進している。

「シャークスのOBやOGも各面で活躍しており、全日本のU18やU16の選手に選ばれています。また、女子では日韓交流で札幌選抜チームの一員として今年OG五名が韓国に遠征しました。今後日本代表が誕生するのも夢ではありません。泊村アイスセンターなどハード面の設備をさらに活用していくため、これからはソフト面をもっと充実させて次

のステップへと進んでいきたいと思えます」と西宮さんは語る。小学生たちの大活躍に元気づけられスポーツと交流による一層の地域

活性化をめざす泊村。氷上から湧き上がった熱い思いをパワーにして進む泊村のこれからの注目していきたい。

リンクに輝く瞳が 明るい未来へ虹を架ける

★パークゴルフ場「とまりカブトラインパーク」

泊村の景勝・カブト岬を眺めるドライブコース「カブトライン」沿いにある村民のスポーツと憩いの施設。雄大な日本海を眺めながらのびのびとパークゴルフを楽しめる。メイン施設であるパークゴルフ場は自然の地形を生かした夜間照明付きの18ホールで、村民をはじめ村外からの多くの愛好家たちで賑わう。



高台にあり眼下には積丹ブルーの海が広がる

公園内にはその他にもテニスコートや多目的広場、バーベキューハウスなどがあり、家族連れからお年寄りまで広く利用されている。

利用期間は4月下旬から11月中旬まで。使用料はパークゴルフ、テニスコートとも村民は無料、村外の方は100円。貸し用具は一律で100円となっている。

★村全体を結ぶ情報ネットワーク「とまりねっと」

「とまりねっと」は村内全戸と公共施設を光ファイバー網で結ぶ情報ネットワーク。下水道事業に合わせて整備したもので、村民と役場、診療所、総合福祉センター、学校などの公共施設が通信ネットワークで結ばれ、家庭にしながら村の情報をキャッチできる。無料でパソコンが貸し出されているほか、光ケーブル網を利用したケーブルテレビに無料加入でき、村役場内に設けられたスタジオからの放送で、泊村長杯選抜アイスホッケー大会、祭り、運動会など村内のイベントも観ることができる。



役場内にあるスタジオで番組制作をする職員

番組は役場職員が撮影・制作している。地上・BSデジタル放送の視聴もできるため、村内の住宅にはテレビアンテナが立っていない。

また希望者には、パソコンと血圧計などを連動させた「在宅健康管理システム」や、独居老人宅での人感センサーを使った「安心システム」などの利用も可能となっている。

民の健康増進」を掲げ、そこで考え出されたのが小学生のアイスホッケーチームだった。

「子供たちは抵抗なくスケートに馴染めるし、チームがあれば継続してリンクを活用できる。それにスポーツを通じてルール、マナー、チームワーク、思いやりを学べます」と話すのは、泊村教育委員会の赤平晃さん。泊村長杯選抜少年アイスホッケー大会は教育委員会の所管で開催している。またアイスホッケーは子供たちに自信を与えたという。

「他の地域の子供たちと試合や練習で交流することで田舎の子特有の物怖じがなくなった。都会の子と対等に戦えるという自信は村の子供たちの成長に大きな影響を与えています」

泊村アイスセンターを核として住民に元気を

村はシャークスや長ぐつアイスホッケーチームを様々なかたちで支援している。無料でリンクを提供し



泊村教育委員会
あかひら あきら
教育次長 赤平 晃 さん

ているのももちろん、用具・防具などもアイスセンター備え付けのものを無料で貸し出している（多くの場合はスケート靴やスティックは各自が負担）。また試合の遠征のための交通費も村が負担している。村の支援の一方で心配なのはメンバー数の減少だ。

「現在、泊村の小学生の数は一年生から六年生まで合わせて百八人。シャークスのメンバーは毎年二十人前後いましたが今年は十四人です。近隣町村と一緒に、今後について考えていかなくてはなりません」と赤

CHAPTER 3 交流の促進でふくらむ村の未来

アイスセンターから生まれる外部との交流

現在の泊村アイスセンター利用者は村民を含めて年間約二万人。多い年でも二万六千人ほどだった。人件費、電気代、リンク整備などの維持管理費を合わせると年間約八千万円にもなる。収入となる施設利用料が安いので、とても採算はとれない。電源三法交付金を活用して賄っているのが現状だ。それでも村にとって施設の採算を上回る様々なメリットがあると、泊村役場企画振興課の

平さん。シャークスに参加できるのは小学生まで。地元で中学生のチームがないので、一部の子供は札幌のクラブチームに通うなどしてアイスホッケーを続けている。中学生になつてからは長ぐつアイスホッケーに参加してくる子供も多い。

アイスホッケーだけでなく、村ではトレーニングルームに講師を招き、住民に健康増進のためのトレーニング法を指導するなどの取り組みも行っている。これからも教育、文化、健康を推進する核として、泊村アイスセンターを活用していく方針だ。

西宮勝彦さんは語る。

「シャークスの活躍や長ぐつアイスホッケーの盛り上がりなどで子供から大人まで住民に活気を与えたという効果もありますが、アイスセンターを中心に外部との交流が増えたことも大きなメリットです。高校、大学、企業のアイスホッケーチームのほか、アイスリンクを使う様々なスポーツのチームが合宿、練習、試合などで訪れ、新しい交流が生まれました」これまでに早稲田大学、王子製紙などのアイスホッケーチーム、雪印のジャンプチーム、そして



泊村役場 企画振興課
にしみや かつひこ
課長 西宮 勝彦 さん

昨年はバンクーバーオリンピック直前に全日本ショートトラックスケートチームが強化合宿を行っている。また全日本女子アイスホッケー大会の会場になったこともある。

「オールシーズン利用できるとともにトレーニング施設やミーティングルームを備えていることもアイスセンターの魅力になっています。合宿などで人が訪れると、旅館、民宿、レストランなどを利用してくれる。また交流は村のアピールにもなり村全体にいろいろなパワーを与えてくれます」と、西宮さんは交流の効果を評価する。

企画振興課ではインターネットのホームページ掲載等により、泊村アイスセンターのPRと合宿の誘致を行っている。

ふれあいと活気のあるむらづくりをめざして

泊村では第三次総合計画（十カ年計画）の中で、「ふれあいと活気のあるむらづくり」の一環として生涯